

【旧約聖書日課】出エジプト記 3章1～15節

¹モーセは、しゅうとでありミディアン¹の祭司であるエトロの羊の群れを飼っていたが、あるとき、その群れを荒れ野の奥へ追って行き、神の山ホレブに來た。²そのとき、柴の間に燃え上がっている炎の中に主の御使いが現れた。彼が見ると、見よ、柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きない。³モーセは言った。「道をそれて、この不思議な光景を見届けよう。どうしてあの柴は燃え尽きないのだろう。」

⁴主は、モーセが道をそれて見に來るのを御覧になった。神は柴の間から声をかけられ、「モーセよ、モーセよ」と言われた。彼が、「はい」と答えると、⁵神が言われた。「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから。」⁶神は続けて言われた。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは、神を見ることを恐れて顔を覆った。

⁷主は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追いつく者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。⁸それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地、カナン人、ヘト人、アモリ人、ベリジ人、ヒビ人、エブス人の住む所へ彼らを導き上る。⁹見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た。¹⁰今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」

¹¹モーセは神に言った。「わたしは何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。」

¹²神は言われた。「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える。」

¹³モーセは神に尋ねた。

「わたしは、今、イスラエルの人々のところへ参ります。彼らに、『あなたたちの先祖の神が、わたしをここに遣わされたのです』と言えば、彼らは、『その名は一体何か』と問うにちがいがありません。彼らに何と答えるべきでしょうか。」

¹⁴神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」¹⁵神は、更に続けてモーセに命じられた。

「イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主がわたしをあなたたちのもとに遣わされた。

これこそ、とこしえにわたしの名、これこそ、世々にわたしの呼び名。」

【福音書日課】ルカによる福音書 20章27～40節

27さて、復活があることを否定するサドカイ派の人々が何人が近寄って来て、イエスに尋ねた。28「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。29ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、子がなのまま死にました。30次男、31三男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子供を残さないで死にました。32最後にその女も死にました。33すると復活の時、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」34イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、35次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。36この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。37死者が復活することは、モーセも『柴』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。38神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」39そこで、律法学者の中には、「先生、立派なお答えです」と言う者もいた。40彼らは、もはや何もあえて尋ねようとはしなかった。

聖なる場所【こども説教のために】

今日も皆さんを、「聖なる場所」にお迎えしました。教会は、「聖なる場所」です。「わたしはある。わたしはあるという者だ」とご自身の名を名乗られる不思議なお方、「聖書」の民と「教会」のわたしたちが「主」とお呼びする神が、ここにはいらっしやいます。ここは、主なる神がいらっしやる「聖なる場所」。教会は、「聖なる場所」です。「わたしはある」と名乗られる神、「主」がいらっしやる場所は、「聖なる場所」なのです。

ここが「聖なる場所」であることを知らずにおいでになられたとしても、仕方ありません。モーセも、そこが「**聖なる土地**」だと知らずに、近づいて行きました。羊飼いとて羊を追ってきた山で、柴が燃えていましたので、様子をうかがっていました。いつまでたっても燃え尽きないので、不思議に思っていました。燃え尽きるまで見届けようと立ち入ったところは、「聖なる土地」でした。そこには、神がいらっしやったのです。

誰もいない礼拝堂に立っていると、かつてここにおいでになられていた先達のことを思い出されます。わたしたちに、「神はここにいらっしやる。わたしと共にあられる」と示してくれた、多くの先達です。教会が「聖なる場所」であることを教えてくれた先達です。「天上」に行かずとも、ここに「聖なる場所」がある。そう教えてくれた先達に導かれて、神の前に立つのです。

道をそれてみる

初任地は地方の小さな町の教会でした。比較的広い敷地に、40人も入ったら一杯になる小さな教会らしい会堂と納骨堂と牧師館が建っていました。あるとき、会堂の入口に小銭が置いてあることに気づきました。誰かが落としたというよりも、わざとそこに置いたようでした。しばらくして、納骨堂の前にも小銭が置かれていることに気づきました。不思議に思っていました、間もなく理由が分かりました。時折来られては黙って会堂と納骨堂に向かって祈って帰られる方があったのです。声を出して祈って拝礼をすると、会堂の入り口や納骨堂の前に小銭を置いて行くのです。思い切って、声をかけてみました。日曜日の礼拝にもお誘いしてみました。けれども、丁重に断られました。「自分は、教会だけでなくお寺や神社でも、自己流のお祈りをしているだけです」と言うのです。その後も、小銭が置かれることは続きましたが、わたしは、以後、声をかけるのをやめてしまいました。それでよかったのか、今でもわたしの心に引っかかっている出来事です。

寺社の前を通りかかったときに、必ず参拝したり拝礼したりする習慣の方は、少なからずいらっしゃるようです。夜のウォーキングで、しばらく公園の向こうの由緒正しい神社の前を通り道にしていたことがあります。たまたまそこで行き交った人が、鳥居の前で立ち止まって拝礼をしてから去って行くという光景を、何度も目撃しました。わたしには、不思議な光景に思えました。わたしたちは、たとえ通り道に教会の建物があっても、そこに向かって頭を下げるというような習慣はないからです。もちろん、会堂・聖堂に入って、礼拝堂で頭を垂れて祈る、ということはありません。

日曜日の礼拝でもなく、平日の集会でもなく、業者の営業でもなく、飛び込みで教会においでになる方が、少なからずいらっしゃいます。人の気配に気づいて様子をうかがいはしますが、黙って礼拝堂に上がり、祈って帰られる方には、声をかけることもいたしません。何かを求めて来られた様子の方には、声をおかけします。ご用事をおうかがいして、わたしは必ず、どうしてこの教会にいらっしゃったのかとお聞きします。すると、「通り道にあることを知っていたので」と答える方が少なくありません。

モーセは、羊の群れを追って通りがかった山で、柴の燃え尽きない不思議な光景を見て、「**道をそれて**」みたのです。少しの道をそれてみたことが、その後の人生を大きく変えることになりました。自分が「共にいるべき人々」を示され、その人々と共にある人生へと踏み出していったのです。「**わたしは必ずあなたと共にいる**」というお方が、その後押しをしてくださったのです。

わたしたちも、それぞれの人生の道をそれて、この「不思議な光景」の広がる「聖なる場所」に立ち寄っているのです。

「わたしはあなたと共にいる」

モーセの「柴」の出来事を聞くたびに、わたしは、教会とは「聖なる寄り道先」なのだと思わないではいられません。皆さんは、毎週日曜日、「聖なる寄り道」をしているのです。

もちろん、「寄り道」を無駄に思う人もあるかもしれません。最近、「タイパ」という言葉が使われるのを知りました。忙しい生活の中で、少しでも時間を無駄にしないようにという意識で用いる言葉のようです。ひとときもスマホを手放さない若者を見て、わたしたちは、どんなに時間を無駄にしているかと勝手に思いがちですが、彼らの言い分は違います。交友関係を維持していくためにスマホでチェックしないといけない情報が多すぎるというのです。彼らにとっては、スマホを眺めることは、「暇つぶし」でも「寄り道」でもなく、毎日の生活で必須のことなのでしょう。

実のところ、若者たちだけでなく、社会全体が、そうなのかもしれません。予定していなかったこと、計画になかった「寄り道」は、できるだけ避けたいと、多くの人が考えて行動しているからこそ、若者も、そう考えるのでしょう。実際、わたしたちは、普段、どれほど「寄り道」をしてみているでしょうか。「寄り道」をする余裕が、どれほどあるのでしょうか。

人生で「寄り道」をすれば、そこで新しい人間関係も始まります。世の中の宗教離れは、「宗教心」が失われたのではなく、「宗教団体」が避けられているのだ、という見方があります。確かに、教会のような宗教団体に関われば、一人自分の信仰や宗教心で済まない、新しい人間関係が次々に生じてくることでしょう。それを避けたいと思う方がいるのも、わかります。

そうであれば、教会も、インターネットを用いた「オンライン礼拝」や「動画配信の聖書研究」を中心にすればよい、と考える人もいるようです。経費がかかるといふのなら、「オンライン献金」を設定したり、「動画」などを有料で視聴してもらえばよい、というのです。実際、これからの時代、そのような方法が選ばれていく可能性は大きいでしょう。

それでも、わたしたちは、「寄り道」を続けるべきでしょう。教会を「聖なる寄り道先」として開き続けるべきでしょう。ここで、わたしたちは、すでに知っている「共にいるべき人々」、あるいはまだ見ぬ「共にいるべき人々」のあることを知るようにされるからです。ここで、「共にいるべき人々」と共にある道を示されるようになるからです。何よりも、ここで、わたしたちを「共にいるべき人々」と結びつけるお方、「必ずあなたと共にいる」というお方が、本当にここにあられることを、知るようにされるからです。

先達と共にあられたお方は、今、わたしたちと共にいてくださいます。そして、わたしたちが共にいるべき人々とも、共にいてくださるのです。